

(3) 金沢大学宝町遺跡医学部立体駐車場地点の調査

調査面積 約3,767㎡

調査期間 2005年7月7日～2005年12月20日

検出遺構 江戸時代～明治の溝3条以上、道路跡、側石積の区画、土坑多数、その他少数の近代遺構。

医学部敷地内の南東に位置する駐車場は以前グラウンドとして使用されていたが、ここを立体駐車場とするため事前に発掘調査を行うこととなった。昨年度に医学部解剖実習棟の発掘調査が行われ、旧経王寺の西辺を画する溝と門関連の施設に付属する橋跡などが明らかとなっている。今回の調査地点は解剖実習棟の南部に隣接し、旧絵図によると経王寺南西部、如来寺北西部および如来寺の西外側にある百姓地を含む部分に相当する。発掘調査の結果、グラウンドとして利用されてきたため後世の攪乱は少なく、遺構の残存状態は良好で上の予想通りの成果が得られた。

発掘区内で検出された主要な3条の溝は各施設を大きく区切るもので、①発掘区北側の東西溝PW132は経王寺の南辺西部、②発掘区東側の東西から南北に屈折する区画溝PW91は如来寺の北西隅にあたると思われる。③発掘区中央に位置する南北溝PW140とこれにT字形に交差する東西石積列PW135は寺域外の別の区画であり、石列の南西側を中心に暗渠や建物柱穴が認められることから居宅地と推定される。すなわち二つの寺院と寺院外の居宅地という三つのエリアが表れている。各エリアは溝の新旧関係などから、大略3期ほどの変遷が判明している。これら①②③の区域の内部すなわち溝・石積列PW91・132・135の三方の線に囲まれた土地④(図1の中央部北側)は平面三角形をなし、①②③の敷地よりも一段低い湿地帯である。この部分には多数の土坑が検出された。

各エリアの遺構について補足しておく。

①溝PW132

東西方向の溝で検出部分の中央あたりでは鈍角に屈折する(図3)。大きく3期の変遷があり、I期(古期)の溝132Aの幅は約4mで、次のII期には溝の掘り直しがあり、部分的には溝内に長い土坑が掘られI期の溝底面をさらに深く掘り下げている。最新のIII期は大学の敷地造成に伴うもので、もとの経王寺所有地から大学が買収した後の時期にあたる。II期の溝は埋没し上面はまだ溝状の窪地となっていたらしく、これを埋めて平地化した。とくにII期には大幅な掘削工事によりI期の形状は損なわれているが、I期溝北側肩部分の残存程度は良い。PW132の西側延長は昨年度の調査で検出された旧経王寺の西辺を画する南北溝(PW131)に接続すると考えられる。経王寺境内は溝の北側となるが築地・塀や寺関連の遺構は確認されていない。PW132の南に接し並行して東西に走る道路RD003がある。この道路は路面に砂利を敷き詰め、大学買収直前まで機能していた近代のもので(旧下鶴間町道路)、東側延長部は現在の道路に連続している。RD003は古期にも道路として機能していたと考えられ、土坑などで掘削されず細長い空間地となっている。

②溝PW91

この南側の一部は過去の発掘調査で確認されている(註1)。PW91の北側は南北方向から東方向へと鈍角に屈折し、東側延長は上記の溝PW132と平行に走る。この屈折部は如来寺外郭の北西隅にあたる。この溝でも3～4期程の変遷がある。溝の南北方向では北と南半部で変遷過程は異なり、北半部において改変が多い。古期の溝幅は約3.5mの素堀りであるが、次の時期には西側から溝の肩が東へと移動し溝幅を1m前後に狭めており、溝の西肩のみ石積みに変わる。石積み以前に角材横木で護岸とした箇所もあ

るので、この時期はさらに2小期に細分される可能性もある。最新の時期は上のPW132と同様に大学の敷地造成に伴うもので、溝状の窪地となっていたPW91を埋めて平地化している。



図1 調査地全景 1/400 (上空から)

③南北溝PW140・東西石積列PW135・段状区画PW152以南の遺構

PW135ラインの南側は上記の経王寺、如来寺の寺域外の生活空間で延宝年間の古絵図では畠地あるいは百姓地と印されている部分にあたる。ここでも空間地の形状や利用形態について変遷があるが、寺域内に比べて造成の変更が頻繁に行われている。古期段階では地山を掘削した段PW152のラインは直線的に東側に伸び、上記②のPW91南北溝に接続する。この段は敷地の北側を区画していたもので後に東西石積列PW135（図2）に改変され、PW152ラインの北側（区画の外側）を埋めて敷地を北側に拡張している。この整地はPW135の中央部で交差する南北溝PW140との交点を境として、東（PW152A）・西（PW152B）側ではそれぞれ異なる埋土で整地される。またこの交点で石積列PW135は鈍角に屈折し、東半部では古期の段（PW152A）よりも北側に偏する位置に変更している。PW135東半部の石列の残存は良好ではなく後世の破壊を受けているが、列の北側に沿って新たに階段状石列や整地および礫を敷き詰めて道路として利用した痕跡がある。道路利用の段階は上記②の溝PW91西側肩を石積みに変更した時期と重なる。なおPW135・PW140交差点より東側石列の積み方は西側と異なることから東側石列は新期に延長した可能性がある。

東西溝PW145は南北溝PW140の中央付近で直交し、PW152BとPW140で区画された敷地をさらに南北に分割して宅地の二区画を示している。敷地の東側ラインは出入りがあるため、各宅地毎の改変・造成が行われた可能性もある。PW145には2列の石組み溝があり、PW140に接続する。

PW140にも数時期に及ぶ重複関係がある。溝底の地山面では2条の小溝が東・西に並列して走り、上部は新期溝の幅1.5～2m前後の堆積土となる。下位の東・西溝の前後の切り合いについては痕跡を留めていないが、部分的に確認したところではPW140西溝よりもPW140東溝の方が新しい。またPW140東溝は新期溝の下層として理解するならば、新期に溝を東側へと掘り直した事になる。PW140の西肩に接して溝と平行に列をなす土坑群がある。PW145を境として南半部にPX1674・1598・1604、北半部にPX1693・1691・1692・小溝PW144・146などがあり、重複関係によりこれらは新期溝以前につくられた事は判明するが、古期の溝との直接的な新旧関係は不明である。ただし列をなしていることから、土坑群の開鑿にあたってはPW140古期溝ラインの制約を受けていたと考えられ、土坑群の方が溝より新しいと考えられる。

PW140南半部では溝内に深い長方形土坑群PX1600・1605があり、土器・木製品・漆製品などが多数出土した。土坑のプランは完全に溝内に収まっていたので輪郭を上面で確認できていないが、溝がある程度埋没した後、新期に掘削された土坑と考えられる。同様な傾向は上記①溝PW132や②溝PW91の一部でも確認している。

PW140北半部では土坑群およびPW140の埋没後、浅い小溝PW143が新たにつくられる。この溝の東側のみに西面する石列をつくるが連続せず、北側は別の東面する石列区画があり複雑となる。次に最新期の遺構としてはこれらの石列を残したまま、西側を整地し小礫を敷き固めて道路RD001としている。

PW91・140の二つの南北溝に挟まれた空間の南半部には多数の土坑が密集する。土坑相互の切り合いも多く短期のものではない。空間の北半部は現代の掘削のため多少地面は低い、土坑は少なく宅地や小広場としての機能が考えられる。土坑の多くは生活廃棄物処理用と考えられるが、中には墓地関連または祭儀、供養などの行為後の廃棄と思われる遺物を出したものもある。図4のPX1540・1560は多数の土器・陶磁器や漆器を廃棄した土坑で、図5に示すような「寛政六（年）九月....忌日」銘（1794年）の墨書土師器皿がPX1560から出土した。これらの土坑群は宅地内を避けて空地に営まれた。

④三角形の低湿地帯

この部分は一段低いため古期の堆積土が厚く残る。下の地山面では土坑が多数検出された。中には礫を大量に廃棄した大形土坑があり、敷地掘削などの際に地山から出る礫の捨て場と考えられる。

以上のように遺構群のうち経王寺、如来寺の寺域を画する溝PW132・91については溝の埋没後の掘り直しや土坑の設置など改変を受けているが、大きな区画の変更はない。古期段階はPW132・91とも素堀り溝で3～4m幅の規模を有し、溝の肩の線も出入りなく直線的に整備されたと見られる。PW91は後に西側からの敷地拡張により西肩のみを石積護岸に変えて溝幅を狭めているが、如来寺の西外郭線は守られている。③のエリアの利用過程は複雑である。古期のPW152段造成については、AとBの整地土の差が異なる時期のものである可能性も考慮される。さらにPW152Bに伴うと見られる下層の溝を一部確認しており、これはPW140交点で南側へ屈折する事から、PW152BとPW140古期溝を連続した逆L字形の区画が当初の形態とすることも可能である。ただし各遺構に新古の差があるので他の形態も採りうる事から今後の各期、各遺構出土遺物の検討後に再考する。

経王寺周辺について江戸期時代における各期の古絵図を見ると、経王寺南辺を画するPW132の屈折点や如来寺北西の鈍角をなす角の位置に相当する部分が印されているので、今回の遺構検出状態と対比させることができる。とくに③の寺域外の土地に注目しておく。

- (1) 寛文八（1668）年「加賀国金沢之絵図」では経王寺南辺の溝と南に接して道路が印される。これはPW132とRD003位置に相当すると見られる。③のエリアは空白で何も印されていない。
- (2) 延宝年間（1673～1680）経王寺・如来寺外郭線の距離が示された絵図である。水路（溝）については不明。経王寺南辺の屈折部以西は道路が印されるが、経王寺・如来寺間は不明。③のエリアでは経王寺南辺の屈折部よりやや西側で道路は逆L字形に南へ折れ、南北道路の東側は百姓地、西側は分割された宅地となる。この逆L字形の位置はPW152BからPW140の屈折に相当するが、溝として印されたものはない。
- (3) 延宝年間（石川県立図書館所蔵）ほぼ(2)と同様な絵図であるが百姓地は畠地と印される。
- (4) 「金府大絵図」。(2)で見た逆L字形区画はそのまま印され、この北辺の道路線は水路として印されているが、ここではさらに東へ延長している。この東への延長線はPW152AないしPW153石積列に対比される。
- (5) 享保十九（1734）年「加陽金府武士町細見図」（金沢市立玉川図書館所蔵）かなり概念化した絵図であり、経王寺・如来寺の略長方形外郭線や方向など正確に印されていないが、上の(4)では逆L字形区画の北辺道路線の東延長部は水路として印されていたが、ここでは道路として印され如来寺の西外郭線に接している。なお逆L字形区画および東側は畠地の印が打たれる。
- (6) 宝暦九（1759）年以降「経王寺絵図」（前田育徳会所蔵）（註2）経王寺外郭線および建物配置が印される。この絵図は外郭南辺の屈折部、また昨年度の調査で検出された外郭西辺の門・橋跡など実際の遺構との近似性が強いものとして注意される。上の(5)以降の時代であり、(5)における略図化された経王寺外郭はここで旧時の形態を維持している事もわかる。
- (7) 天保・安政年間（1830～1860）絵図。経王寺南辺の屈折部は弧を描くように印されている。逆L字形区画と東側延長線も印されているが如来寺と接する部分は弧線状に変わる。また如来寺北西の角はなくなり弧線と一体化する。
- (8) 安政元～二（1854～1855）年絵図。(7)と同様な形態であるが、経王寺南辺の屈折は直線的に印され、逆L字形区画北辺の東側延長線は弧状ではなく直線で如来寺側と一体化する点は同様である。
- (9) 明治3（1870）年絵図。(8)とほぼ同様である。

他に(5)と(7)間に入る1800年前後とされる絵図があり（個人蔵）、逆L字形区画の北辺延長線は水路として印され、如来寺の西外郭線に接している。(4)とほぼ同様である。

上記史料では寛文八（1668）年以前の内容は把握する事はできない。すなわち経王寺の創建年代とされる慶長十（1605）年から寛永八（1631）年の金沢大火による延焼以後、正保四（1647）年の再建直後までの期間である。検出した経王寺・如来寺関連の古期溝について年代検討を要する。

以上絵図の変遷から、③のエリアは1668年頃は空地、1673～1680年頃は逆L字形区画ができ、1734年頃以降には逆L字形区画の北辺が東側へ延長し、如来寺外郭線に接したという過程を読取ることができる。仮にこれを検出遺構に対比させると、逆L字形区画の北辺はPW152BまたはPW135石積列西半部、同東辺はPW140西溝・東溝および道路RD001のいずれかとなる。逆L字形区画の北辺の東延長線はPW152AまたはPW135石積列東半部およびPW135新期施設（階段および整地、道路）となる。遺構の実際の変遷過程は複雑であり、前述してきたように複数の組み合わせが可能となるので今後の整理過程で明らかにすることとしたい。

（註1）金沢大学埋蔵文化財調査センター「金沢大学文化財学研究2 1. 金沢大学宝町遺跡」2000

（註2）経王寺『寿福山経王寺誌』2002



発掘調査状況 左：如来寺区画溝PW91（南から）、右：土坑PX1750（東から）



図2 PW135石積列検出状態（西北から）



図3 PW132経王寺南辺溝の屈折状態（西から）



図5 PX1560出土墨書土器



図4 PX1540・PX1560土器出土状態（北から）



(北東から)

宝町遺跡医学部立体駐車場地点 全景